

# 人はなぜ谷中へ吸い寄せられるのか

—— 谷中銀座

日暮里駅から西へ歩いていくと、途中から道が二股に分かれて下り坂が出てきます。まっすぐ進むと谷中銀座。左へ曲がると墓地に沿った七面坂。

このふたつの坂を下った先からは、それぞれどんな音が聞こえてくるのでしょうか。安藤鶴夫の小説『巷談本牧亭』に次のようなくだりがあります。谷中銀座は「始終、ちんどんやが音を立てていて、生きていることを大きな声でみんなにどなっている」。一方の七面坂では「たいてい、どこかで木鐘を叩いて、勤行の音がしている」。

谷中には大きな墓地があり寺町でもあります。下町の賑わいの外側に寺町の静けさが控えているのがまちの特徴のひとつと言えるでしょう。訪れる人は、路地の軒先の小さな自然や神出鬼没にあらわれる猫たちを眺めているうちに、「情緒」や「風情」といった言葉

を頭に浮かべるかもしれません。

それにしても、これらまちの魅力を表す言葉の使い方は思いのほか難しいものです。人はなぜ谷中に吸い寄せられるのか。その問いに付き合うためにも実際に足を運んでみることをお勧めします。この小さなまちは何かヒントをくれるかもしれません。例えば、これからのまちづくりについて、など。

ちなみに『巷談本牧亭』が新聞に連載されたのは昭和37年で、約半世紀も前のこと。かつての東京の一風物として登場する谷中のまちですが、そこに描かれた姿と現在の姿から受ける印象の間には不思議と大きな隔たりを感じません。昔と今をつなぐ一本の芯が、時代の移り変わりを縫いながらもしっかりと通っているのでしょうか。そして、このまちの魅力的なこまやかさもまたそこに由来するものであれば、それは本来すべての暮らしの場が備えていたはずの性格だったのではと、私たちに思い出させてくれるのです。（石川巧）



谷中銀座と交差する谷中三丁目の商店街



# 「昭和駅前遺産」に登録したいまち——京成立石

昭和の時代、東京のあちこちの駅前には活気溢れる商店街がありました。世はクルマ社会へ移るとともに大規模商業施設に客足を奪われ、シャッター通りになったところが多いこのごろですが、どっこい、元氣な商店街もあります。

夕暮れ時、惣菜を品定めする主婦。焼き鳥の包み片手に家路を急ぐサラリーマン。立ち飲みの店でコップ酒をチビリとやる老人……。まるで映画『三丁目の夕日』を地でいく光景が広がる京成立石駅周辺は、「昭和駅前遺産」とでも呼びたくなる風情に包まれています。

駅ができたのは大正末期。ノンビリした葛飾の田園地帯だった駅周辺は、関東大震災を境に一変します。都心部で焼け出された人たちが工場への移入で活気ある下町へとしだいに変わっていったのです。各駅停車しか停まりませんが、京成線では乗降客数が京成上野駅について今も10番目に多い駅です。

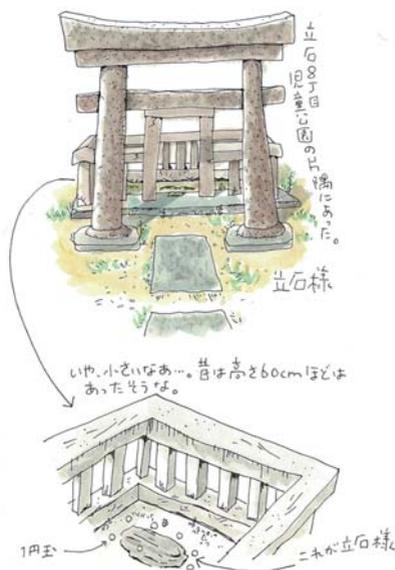
駅南口には、立石駅通り商店街と立石仲見世商店街の2つのアーケード街があります。すごいのは仲見世の方。肉屋、八百屋、惣菜屋、蒲焼き屋、乾物屋、立ち飲みの居酒屋や寿司屋などが狭い通路を挟んでびっしり軒を連ね、けっこうな繁盛ぶり。店の人も店構えも相当に年季が入っていて長い歴史を感じさせますが、それもそのはず、アーケードができたのは半世紀前の昭和35年。前身は闇市のマーケットです。戦後間もなくの東京に無数にあったマーケットですが、今もあの頃の気配を残しているのは上野のアメ横や吉祥寺のハモニカ横丁など、数えるほど。ノスタルジックな仲見世に惹かれて、土日ともなれば東京の西側から観光気分で見学に来る若者やオジサングループだって少なくないとか。

実はいま、駅周辺で再開発の動きが進んでいます。直下型地震が起きるリスクが高まる中、防災の観点で課題の多いまちを安全にするのは重要です。しかし、

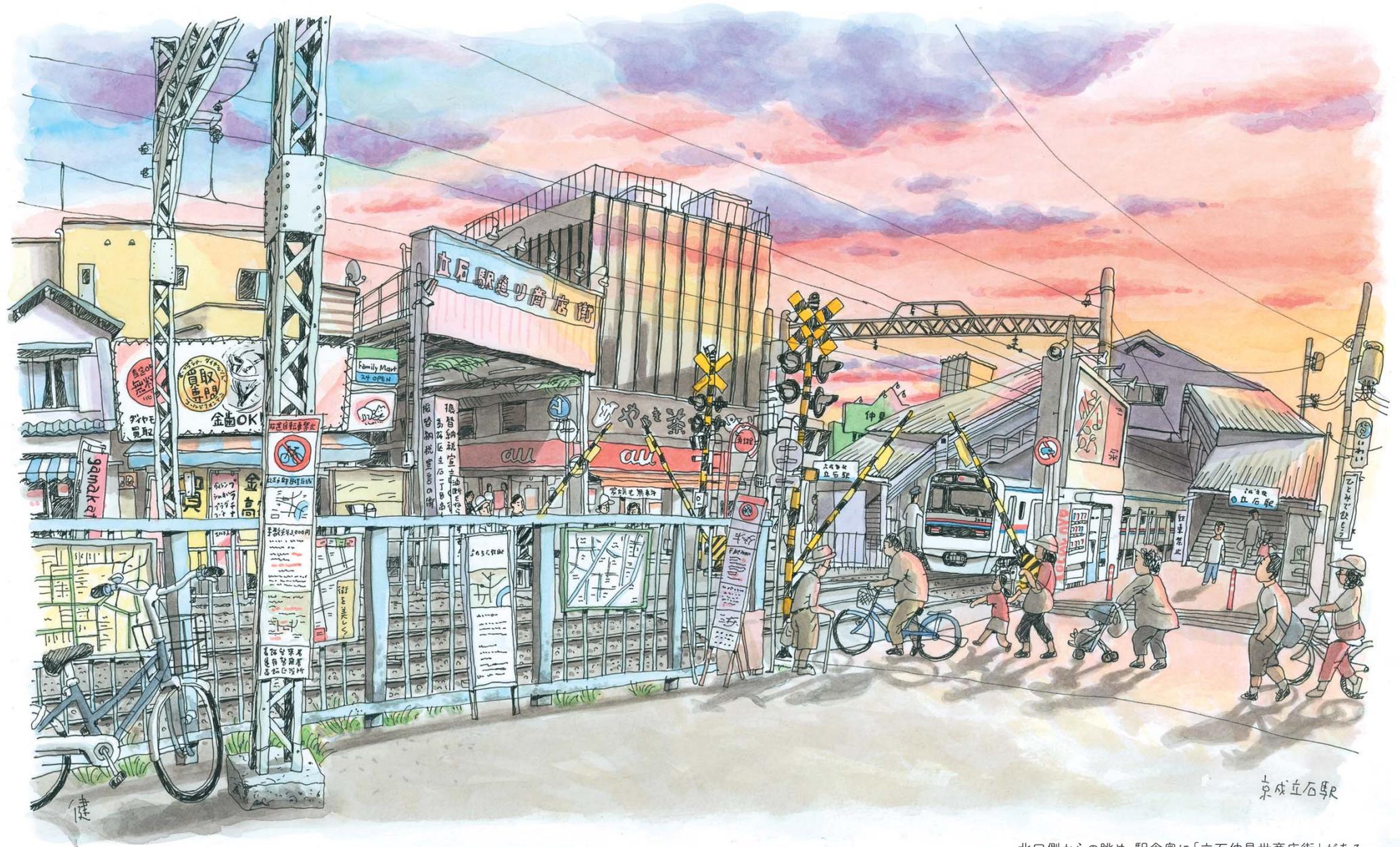


鶏肉店は裏に居酒屋併設。「酔てる人お断り」の貼紙があり、赤い顔で入ると老婆に叱られる

仲見世のように長い時間を積み重ねなければ醸し出せない雰囲気、新しいまちに再現するのは至難の技。古いまちが抱える課題をハードの更新一辺倒でなく、地域の人々が一体となって知恵を出し、防災の意識を高める仕組みづくりとハードとの合わせ技で乗り越えられないものか……。自由が丘にも田園調布にもない、猥雑にして愛すべき立石のまちを歩きながら、そんな思いを巡らせました。



地名の由来といわれる「立石様」



京成立石駅

北口側からの眺め。駅舎奥に「立石仲見世商店街」がある